園長さんのためいき

松下 昌義

園長さんのためいき

昭和50年4月1日

著　者　　松　下　昌　義

発行所　　左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶の木町 29

頒価 800円

はじめに

ここに収録しました文章は、白百合ホームが毎月園児の保護者に出しています「保育通信」に記した文章です。

文章は、昭和四十三年以降のもので、少し古いものもありますが、育児のうえでお母さん方に参考になればと思い一冊にまとめてみました。

私が幼児の教育にかかわるようになって十年になりますが、その間、人間一生の間で幼児期の大切さを知らされ、よりよく保育することの責任を日増しに重く感じさせられています。

しかし、一方に於て園で行う保育の限界をも強く感じさせられて来た十年でもあります。それは、幼児は何と言っても家庭の子であるということです。特に両親の影響力は決定的であり、はるか教育者の及ぶところではありません。

それ故に、園児の保育は、家庭と園とが、共同し協力してすすめることにより、はじめてよい結果を得るのだということを強張して来ました。

しかし、はっきり申しまして、家庭に於けるご両親がたの育児姿勢は、そうかんたんに変るものでなく、従って園で行う適切と思われる園児えの教育的配慮も、ザルに水を入れるような結果になりかねません。

勿論、園と共に歩調を合せて一生懸命努力して歩んで下さるお母さんお父さんがたもあります。それらのお子さんは、日々どんどん保育効果があらわれ成長して行きます。しかし一般にはそうではありません。保育通信もまともに読まない者、そうして年中同じぐちを、子どもの性格傾向について言っている者、園に入園させっぱなしで、母の集いなどに全く姿を見せない者、いろいろな事情があってのことと思いますが、残念に思います。

そのような現実を前にして、保育通信に何がしかの文章を記すことは、一つの「ためいき」なのであります。

しかし、「ためいき」を出しつつ、それでも明日の子どもの成長を信じ、願い祈りつつ保育をすすめて行かねばなりません。

尚、折々に記した文章ですので、その前後に読んだ書物や聞いた話などから、引用させて

いただいた文章などが、入っていることと思いますが、一つ一つそれらを思い出し明記することが、今となっては出来ないことに、おゆるしを願い、あわせて、それらの著者に深く感謝する次第です。

昭和五十年二月一日

松下　昌義

目次

一、はじめに
一、健康……一
一、ルドルフ選手のこと……三
一、忍耐力を十分に働かせる人に……六
一、幼児のお弁当……七
一、のびのびと育てる……九
一、はにかみと小心……一一
一、日曜礼拝……一三
一、今からでも遅くはない……一四
一、生きるということを考える時……一七
一、指導と訓練……二〇
一、再び指導と訓練……二三

一、親が子どもにしなければならぬこと　……二六
一、雨の日　……二八
一、幼児に於けるけんかの価値　……三一
一、体罰の功罪　……三三
一、白百合ホームの願う保育　……三六
一、特に卒園児のご両親方へ　……三九
一、新学年度の出発にさいして　……四二
一、今日に於ける教育の現状　……四六
一、白百合ホームの教育の根本精神　……四九
一、どこが間違っているか　……五二
一、わが子の自主性を育てる　……五五
一、こどもの「しりごみ」　……五七
一、親は子どもの失敗を許すように　……五八
一、さあ二学期です　……六〇
一、子どもとの対話　……六二

一、子どもの目に注意を　……六五
一、情操障碍人間　……六九
一、クリスマスの月に思うこと　……七三
一、生命を大切にする生活　……七五
一、共に一歩一歩あゆむ　……八〇
一、保育内容と幼児　……八三
一、幼児期の「うそ」　……八六
一、今日の教育を考える　……八八
一、感謝のある生活　……九二
一、親と子と教師と　……九六
一、今日の親が子どもにもつ責任　……九九
一、教育権在民　……一〇二
一、自分を整えること　……一〇五
一、子どもが善く育つために　……一一二
一、「ほんまもん」を生む教育　……一一六

一、叱り方雑感　……一一八
一、考える子ども考えない子ども　……一二二
一、先ず親がしてこそ　……一二六
一、友だち－六才児の場合　……一三〇
一、人間の醜悪さについて　……一三三
一、幼児と絵本－その果す効果について　……一三六
一、完全なる教育を子どもに残す　……一四三
一、子どもの自からなる成長を助ける　……一四六
一、参観日なんか無いほうがいい　……一五〇
一、弁えある人間になること　……一五三
一、逆だちしている教育　……一五五
一、保育効果　……一五八
一、自己反省と愛への出発の時　……一六〇
一、幼児教育について再確認しておきたいこと　……一六三
一、〇才からの宗教教育　……一六六

一、はちまき締めていのちがけでことに当る　……一六九
一、教育の非人間化　……一七一
一、独立心を育てる　……一七四
一、感謝する心　……一七九
一、〃頭は身体を使えば使うほどよくなる〃ということ……一八一
一、体力テストを終えて　……一八四
一、居直りの生活を反省する　……一八六
一、新年の願いと反省　……一八九
一、児孫のために美田を買わず　……一九三
一、最後に　……一九六

健　康

「健康」と書いて「まめ」と昔はかなをつけました。この「まめ」とは「豆」のことで、豆がころがるように心と体とがコロコロと動いてゆくさまを言ったのです。即ち心と体とが一つになって忠実に勤勉によく働いて行けることをいうのです。このように心と体とがしっかり働き合って正しい行動が出来てはじめて健康といえます。ですから不健康・非健康とは、心に故障があるのか、体に異常があるか、あるいは、心と体とがはなればなれになっている場合のことを言うのです。

世界保健機構の健康の定義によると、「健康とは、身体的に病気や虚弱ではない、というだけでなく、精神的にも社会的にも良好（クエルビー）である」ということだとあります。

確かに、身体的に欠陥もなく病気でないことは健康の大切な条件でありますが、これだけでは健康人であるとは申せません。心と体とが一つになって社会的によく適応でき、われもひとも幸福な社会生活が営めるような人であってこそ本当の健康人であると言えます。

しかし、毎日の新聞やニュースは、さまざまな人達の暴行・殺傷・自分勝手なふるまい・他人の迷惑を考えない行い、……等々の困った出来ごとを知らせていますが、今の時代は心の健康が忘れられてしまっている。きわめて不健康な時代だと申せます。

これら数々の困ったことがらの大きな原因の一つは、今日の「教育」の在方にあるように思われます。

人間は一生涯その時期々々に学習しなければならない課題があります。その課題に正しく対処することが出来る智慧を養うことが本当の教育ではないでしょうか。こうした教育を今日の親や教師たちは教育に於てはたしてはいないように思われます。まさに本当の教育の不在ということです。

体の健康も大切です。しかし心の健康もそれと共に大切です。そして心の健康とは、人生の課題に正しく対処し得る智慧をもっているということであります。この智慧の教育は幼児期からしっかりと始めなければなりません。

「健全なる心は健全なる体に宿る」とありますが、心も体も健康であってこそ健康なる人

であり得ることを言ったこの言葉を今一度思いかえして、吾が子の心の健康について今何を親としてなさねばならぬかを、とくと反省し、将来健康な人として在るために為さねばならぬことを園の保育と共にご家庭でもしっかとはげんでいただきたいと思います。

（43・2・19）

ルドルフ選手のこと

ローマ・オリンピックの陸上競技決勝において、一人で三つも女子世界記録を更新したルドルフというアメリカの黒人選手がありました。体格はそれほどでもありませんが、ひときわ目につく機敏な運動神経と鍛えぬいた走法とバネの力に感心しました。この21才の黒人選手ルドルフは7才の頃まで小児マヒの後遺症のため歩くのも不自由だったそうです。しかし、そのお母さんはルドルフを励まして次のように言ったというのです。「ちっともひけ目など

持たなくていいのよ、ほかの人よりゆっくり今まで休んでいただけなの、神様がゆっくり休ませて下さったのだから、これからその分まで運動しましょう、お母さんも一緒に走ってあげますよ」。

そう言って子供と一緒になって遠い道の散歩から、遠足・登山・スポーツと訓練したそうです。そして彼女が高校生になったころにはインターハイの選手になるまでになるのです。このように成長したルドルフ選手の秘密の大きな一つは、信仰心のあるお母さんの子供を見る眼と育児の態度にあったと言えます。

それにしても、ちょっと具合の悪いところがあると、それをひけ目に感じたり、自己弁護につかったり、故障がなくてさえ自分の心身をかばい甘やかす青少年がなんと多いことでしょう。その背後には実は大人の芯のないこと、社会のムードなどもありますが、何と言っても親の心がまえが弱く、ゆがんでいることが最大の原因であります。

「それころぶ！。それあぶない！」というセンチメンタルな態度、神様から与えられている人間の生命力と適応能力のすばらしいことを知らず、箱庭の草花かぼんさいを育てるみた

いな幅のなさ、もやしでもつくるようなかばい過ぎ、その結果はやがて、たくましい適応能力のない、ささいなことにすぐへこたれる心身虚弱者が生じ来るのです。これは皮肉にも丹精こめて弱い子供をつくり、風雪に耐えることの出来ない人間をこしらえているようなものです。

しかし、そんなふうに育てられた子供でも、その弱いムードから引き離して数日でもキャンプ生活の体験などさせ、朝昼晩の生活を通じて訓練の場を与えると見違えるように元気になり、身ごなしがうまくなるだけでなく体育や学習さらに、仕事などまめにする子供になるものです。これは少年裁判官として活躍し、小児科医として活動しておられる森田宗一氏らの言い分です。

人工虚弱児の増加、忍耐力や適応能力の乏しい学習不振児の激増、ノイローゼや自殺の世界記録、気はいいのに、とんでもないことを平気でおかす非行少年の増加。こんな私たちは、今一度他人事としてではなく自分の子育の態度をとくと反省してみる必要は充分あります。

（43・3・21）

忍耐力を十分に働かせる人に

聖書は、「忍耐力を十分に働かせるがよい」と私たちにすすめています。

聖書がいう忍耐力とは、所謂自分の思いをひたすら押えて我慢することではありません。聖書は我慢することの偉大さをすすめてはいません。即ちキリスト教に於ける禁欲的な思想や教えは元来キリストの教えに反することです。

それでは忍耐力とはどういうことなのでしょうか。それは、ものごとに対してそれを処理する智慧または能力のことを指しているのです。

人間がゆたかに生きて行くには、人生のさまざまな出来ごとに出会って、常に右往左往し狼狽していてはだめで、その出来ごとの一つ一つに正しく対処し、処理して行くいわば人生の智慧が必要であります。又その人の値打というものは、人生で出会う出来ごとに対する対し方の智慧で決まるといえます。その智慧を働かせることが、忍耐力を働かせるということの意味です。

聖書が与える智慧とは、人生の最大の問題である死ということがらも正しく対処出来得る能力であります。このような智慧つまり忍耐力を得ている者こそ、人生を強く正しく平安のうちに完う出来るというものです。

私は世の親たちが、こうした知慧をすべてもち、その生活、特に子を育てをして下さるなら必ずその子供は偉大な成長をなしとげるのではないかと思います。

そのように生きる母でありたい、親でありたいと願いつつ今日の母の日を迎えています。

（43・6・1）

幼児のお弁当

お弁当が五月十三日よりはじまります。

園で友だちと一緒にいただくお弁当は、特に幼児にとって、このうえなき楽しいものです。

量からみても一日中で一番おいしく沢山食べる時ではないかと思います。家では何かと文句を云って食べない物も、形を変えたり、食べやすくしたりすることによって、知らぬ間に食べてしまうものです。また大勢の友達との共同生活を利用して偏食を直すにも、大いに役立つ時です。それだけにお母様のあたたかい思いやりをお弁当で与えられるようにしたいものです。

お弁当を用意なさるにつき、次のことがらに気をつけて下さい。

園ではどのようなものでも感謝していただくことを教え指導していますので、特に副食については、子供の要求どおりのものだけをいれないようにして下さい。これは偏食を助長することになります。

お弁当箱は自由ですが（その子供の適量が入るもの）ホックのついた袋物が出し入れに便利で、著籍なども一緒にしまっておくことが出来るのでよいのではないかと思います。

尚、園では最後まで残さないでいただくことを指導していますので各ご家庭でもして下さい。

（43・5・13）

のびのびと育てる

新入園児も、この頃では友達と遊ぶ喜びをみつけ、年長組の子と共に、園内をわがもの顔に楽しく駆けまわっています。身体的にも精神的にも、少し　つ安定してきたのでしょう。

このように集団生活に慣れてくる反面、家庭では時として親の目に余るようなこともしばしば現われて来ます。

「園に行くようになって、子供が悪くなった」

という嘆息をお母さんからよく聞きます。悪くなったというのは、言葉づかいや動作が粗暴になるとか、憎まれ口をきくとか、あげ足をとるといったたぐいです。

しかし親たる者、これらの表面的な現象のみを見て落たんしたり、怒ったりすることは、いささか浅はかというもので、幼児の心のうちというものを考え思いやって見る必要があります。

それは、今まで家庭にいた幼児は、家庭の外に出ていろいろな変った新しい経験をし、そ

の経験したことを大胆にとり入れ活用し、ためし楽しんでいるのです。そして母親たちの反応つまり表情や態度を見、その反応によってじょじょに善悪をわきまえるようになるのです。ですから、決して極度な制止、つまり頭ごなしに制止などせず、家庭外での新しい経験を大胆にとり入れ活用し、ためし楽しみつつ知識の習得をしていることを知って、あったかく見守り、適度にたしなめ導くことによって、その子供は少しづつ、ことの善悪をわきまえるようになります。

さて、このような積極的な幼児とは反対に、消極的な子は、今までの生活と非常に異った人々の群れに戸惑い、自分の身の回りの自立の不安から仲間入りできなかったりします。そしてただぶらぶらと一日を園内で過したり、園の片すみで他の幼児の動作をながめていたりします。幼児のこうした態度の原因は、幼児の入園前の生活の場、即ち家庭生活の違いにあります。

今日の家庭で幼児は、テレビ・菓子・おもちゃなど一般に受動的なたのしみを多く与えられています。その結果だんだんと依存的で根気がなく付和雷動的な子どもになりつつありま

す。

幼児が真に欲するものは、自らの発案や努力によって得られる何ものかです。このことをお母様及家庭の大人たちはよく知って、そのために自由に思う存分はばたかしてやりたいものです。

お宅のお子さんが将来、明るくのびのびと社会でよい働きをする人間になってほしいと願われるなら、幼児のその時より、のびのびと育てていただきたいと思います。

（43・5・23）

はにかみと小心

幼児はよくはにかみます。これは自尊心が強く、内心はほかの人と親しく遊びたいのですが、気が弱くて積極的に出られない状態です。人に認められたいと思うこの要求をかなえてもら

うためには、初めての人から評価してもらわなくてはなりません。これは子どもにとっては恐ろしいことなのです。それではにかむのです。そして、よい子にならなくては、という意識が強く、親が口やかましく子どもの行動を規制し、規範性が強すぎると引込み思案にもなります。また失敗を恐れて小心になる場合があります。失敗を恐れて小心、憶病になることは、失敗するより弊害が大きい場合があります。そのため実力を十分に発揮できないとなるとその子にとって不幸なことであります。他方、規範性が弱すぎて責任、自由奔放にさせとくのも困ります。

とにかく、規範性の強い子どもは、緊張し努力する子どもですが、その緊張や努力がマイナスに働いて逃避的又拒絶的な行動が現われます。はにかみや・小心もそんなところから生れる一種の逃避であり、拒絶だと言えます。

（43・5・23）

日曜礼拝

暑さにもめげず、園児たちが元気で夏期保育のため登園して来るのを、教師一同うれしく迎えています。

さて、明四日の日曜日は全園児が教会学校の日曜礼拝に参加いたします。

日曜日は一週の終りの日であると共に始まりの日でもあります。そこで、一週の間私たちがいろいろな人・物・ことがらとのかかわりの中で、無事にすごせたことを、当り前のこととせずに、神の御恵みの中にあり得たことを知って深く感謝し、同時に新しい一週間も健やかに、各自が与えられた務めをはたし得るように感謝と祈りをささげます。

又日曜礼拝では献金を行いますが、献金は日々の生活を支えて行く大切な財貨を神に献けることによって、自からの真心からの感謝を献げるしるしとするものです。

このように、生きていることについて感謝、その感謝を具体的に行為で示す、という礼拝の意義は、人間が平和で仲よく生きて行く上に忘れてはならない大切な心です。

おくれぬように参加させて下さい。

（43・8・3）

今からでも遅くはない

幼児は、もうすっかり集団生活に適応し、活発に友だちと遊んだり、仕事をしたり、とにかく園に来るのが楽しくてたまらない。といった様子で日々をすごしています。

三才児は四才児とくらべ幼い未熟な面が見られ、四才児は五才児と比較すると、やはり未熟です。しかし各年令児とも、それぞれの年令にふさわしい成熟をしているともいえます。その年令にふさわしい言動や、生き生きとした活動が見られれば、まず安心です。

成熟と未熟の判別をする目安は、幼児がその年令にふさわしい基本的な生活習慣の自立を遂げているかどうかを調べることです。

遠足や運動会その他行事などを通じて母親どうしお互に理解も深まり、子どもも母親も一応の安定ができるようになった頃だと思います。そこで進級・進学をあと三・四ケ月後にひかえた現在、わが子なりの成熟の仕方を見ておかなければ、年度末近くになってからでは間に合いません。成熟の基準に照らしてみて、わが子が未熟であれば、その原因を探り適当な処置を考え実行することです。

生活習慣の自立の遅れは、おおかた親の干渉や過保護が原因で、幼児が自信を失い、依頼心を強くもっている場合のようです。

そこで親は幼児が年令にふさわしい日常生活の習慣を自力で行っているかどうかをみなければなりません。未熟さの原因が親の過保護であることに気づいたならば、親自身が反省し幼児に手出しせず、励ましつつ見守り、少しづつ自立を習慣づけて行くように、その関わり方に於て考えて行かねばなりません。ただ、この場合過保護の原因が父親の父として毅然(きぜん)とした態度の欠如から来る場合が非常に多いのです。

とにかく、幼児の自立の習慣づけは家庭、特に母親父親の仕事です。園がいくら努力して

も家庭が積極的に協力して下さらなければ保育の効果は決して望めないと思っていただいてよい程に家庭の力は強いものです。

ですから、お母様が担任の教師と連絡ノートなどを通し、園での保育に協力して下さる時、その子どもの保育効果はグングンと表われて来るのです。

幼児の個人生活の習慣のしつけを行うには、まず目標を一つにしぼって、いちばん自立させやすいものから、どんなにのろくても、まずくても、その努力を認めてやり、幼児の気持に近づいて、たゆまず行うことです。決して笑ったり、けなしたりしてはなりません。一度に多くの習慣づけを行ったのでは幼児はとまどうだけです。

年令にふさわしい生活習慣の成熟があれば、幼児は物ごとを自分の力でやって行くと同時に、性格的にも自信にあふれ、積極的となり、情緒的にも安定します。少々動作はまずくても、その内容は豊かになり、くふうができるようになります。

いろいろな意味で幼児期の保育の大切さを今更の如く痛感している今日この頃です。園主催の懇談会や母の会等は、どしどし参加下さり母子共々成長して行きたいものです。

〝生きる〟ということを考える時

（43・11）

12月の聖句

「きょう、ダビデの町に、
あなたがたのために救い主が、
お生れになった。
このかたこそ、主なるキリスト
である」　（ルカ2章11節）

今年もあとわづかとなり、いまさらのごとく、過ぎ行く年月のはやさに思いをめぐらす今

日この頃です。

みなさま、お元気でいらっしゃいますか。クリスマスが近づき、園ではクランツをつくり、その中に一週ごとにローソクをつけ、そのローソクが四本になれば、クリスマスが来るのだと園児たちは胸をおどらせ、その日を持って毎日をすごしております。

クリスマスはご存知の通りイエス・キリストの降誕を祝う祭日です。キリストとは救主という意味です。誰のための救主なのでしょうか。それは12月の聖句にあるごとく、あなたがた、即ちわたしたちのための救主として、わたしたちのもとへおいでになったことを知らせております。

今日、世界は種々様々の分野で救主の到来を待望しています。しかし、その場合の救主とは、機構や制度・体制などの改革・革新をうながす物や人であっても、決して聖書のいう救主(キリスト)ではありません。

こうした救主の待望の姿勢は、今日の人間の浅薄さと人間や人生、歴史に対する楽観主義によるものだと思われます。今日の世界がもつ人間の問題は、物による革新、人による革命

などで救い得る程に浅い問題ではないと思われます。

それにしても、人間の長い歴史をふりかえり、自分の人生の生きざまを正直に省みる時、物による救い、只に人による説教においてではなく、聖書のいう救主(キリスト)様の必要なことをつくづくと知るのです。

「すべて重荷を負う者、我に来れ、我れ汝を休ません」

深い思いやりをもって語るキリストの言葉は、私たちの魂の深くまでひびきわたります。物こそ救い、人こそたよれると思っている間は人の世の罪深さを未だ知らぬ楽観主義者です。

人が物や人を救主としてではなく、まことの救主の必要性を知る時、その人は自分の人生に平安を見出し、ものごとに謙虚にかかわる謙虚さを得、所謂人として大人となるのだと思います。また、人生の真の希望と勇気とは、救主が自分のとたろに来り給うているという信仰から生じるのです。

今後世界は、ますます潤沢なものを求め、そのために、いよいよ合理化されて行くことでしょう。しかし、その反面人間はますます非人間化し、必ず、より深く大きい混乱を生み出

し、自から崩壊するに至るでしょう。

クリスマスを迎えるにあたり、今一度自分が生きるということを各々考えてみたいものです。

（43・12・3）

指導と訓練

みなさん、お元気でおすごしのことと存じます。

今月は所謂幼児教育に於ける親の役割について考えてみたいと思います。

戦後わたしたちの国の教育全体に、一つの傾向を与えたものとして、心理学的な発想にもとずく欲求不満という考えがあります。つまり、ものごとのいろいろな問題行動は欲求不満から来るものであって、こどもをして欲求不満におとし入れることなく、こどもの気持を尊

重し、自由に自主的に活動させてやることが大切だという教育態度が、どの家庭の親たちにも広く迎え入れられました。

「それは欲求不満なんでしょう」と言ったお母さん同志の会話が日常ここかしこで交されます。

こうした考え自体は決して間違っていないにしても、その適用の方法に於て知恵が欠けていた結果、こどもをして自己の欲求を抑制しょうとする能力を喪失させ、動物的生本能を強く育てることになってしまったようです。つまり、自由だけ知って規律を知らない人間を育てる結果になってしまったようです。

この責任の一端は、誤ったこども尊重にかるがるしく走った親たちの教育態度にあります。親は、こどもにとって常に生活の指導者であると同時に、生活の訓練者でなければなりません。

生活の指導とは、こどもの気持を尊重し、話しあいを通して、いろいろな約束をすることであり、一方、生活訓練とは、必要上親が、天下り的に決める規則であります。

指導すべきときに、一方的にガミガミと強制し、訓練すべきときに黙ってすごしてしまう、こういう態度は、反教育的態度であると申せます。こうして育てられたこどもは、変なところで力み、克服し耐えねがならない苦難や障害の前では逃げてしまう。そしていつも自信と情緒安定とを欠いているということになりかねません。

人間の成長、発達は自己の欲求と社会の彼らに対する要求との葛藤を克服して行くことによってなし遂げられて行くものです。そして、小さなこどもに於ては、社会の要求の代弁者は親であり、教師であります。したがって、親も教師も彼らに社会の要求を伝えると共に、それと自己の欲求との矛盾克服の方途を学習させる責任と義務があります。親や教師がそのような責任と義務をはたしてこそ、子どもたちは社会的に健全に成長発達して行くのです。

放任・甘やかし・自由の意味を正しく理解することなく、いいかげんな子ども尊重主義は、人間社会の将来に対して罪を犯していることになるのだと言っても過言ではありません。

親たる者、世間の風説にまどわされることなく、自己の生活の価値基準をしっかりともち、確信をもって、自分のこどもを指導し訓練すべきであります。

（44・2・4）

再び指導と訓練について

マスコミ機関が毎日のように報道してくれる大学の騒動は、今や教育の問題というより、社会問題・政治問題化していますが、その根本的原因の一つには、今日の大学自体がもつ諸矛盾や政治的な主張の相違といったこともあると思いますが、さらに、今日の学生達が幼少時代に人間としての基本的な所謂「教育」の欠如ということがあるのではないかと思うのです。

「教育なき民主主義は悲劇に終る」とはアメリカの教育界の合い言葉の一つだそうですが、戦後、「教育」不在の民主主義の中で育つて来た子どもたちの成人した姿が、今日大学問題等で見るあの適応行動を生み出している原因の一つではないかと思います。

先月の〃保育通信〃でも申しましたが、戦後日本の教育をゆがめた学説の一つは、何と言っても欲求不満の理解です。

こどもたちは、これこれの欲求をもっている故に、それを満たしてやるべきだと、こども

に対して許すべきことと、許されぬことなどを混同して、無秩序に何ごとも充足させる一方、文部省公認の学力強化のため無慈悲なほどに、こどもをしめあげ、適切な生活の指導と訓練を欠かした責任は、今日世の大人たちにきびしく問はれるべきだと思います。否今日のあの学園で生じている学生たちの行動は、そのことに対してきびしく問いかけている行為なのかも知れません。

所謂、今日の大人が確固たる指導と訓練とを、その子弟に出来ないのは、大人自身が確固たる人生への価値基準をもっていないからです。近代的なスマートな知識を身につけていても、自己の人生に対する価値基準をしっかりともっていないから知識の切り売りは出来ても、真の人間としての生活の指導も訓練も出来ないのです。

そういう意味で、今日の「教育」不在は、真の教育者の不在であり、真の大人の不在だとも申せます。

さて、もうすぐ白百合ホームは第三回の卒業生を小学校に送り出します。私たち教師は、おあづかりいたしましたお子様を、私たちなりに一生懸命保育を三年又は二年間行って参り

ました。その保育の内容はキリスト教保育であります。

私たちは人生の真の価値基準はキリストの生きざまと、その思想にあると信じて生活しているものです。そして、その価値基準を自からの生活を通し園児とのかかわりのうちで示し語ることにより、園児ひとりひとりの魂の奥底に定着し、将来彼らが雄々しく、でっかく社会ではばたいてもらいたいと念願しつつ保育して参りましたし、今もしております。

こうした、私たちの祈りと願いとを卒園児の父兄も在園児の父兄も、よくご理解下さり、お子さまの宗教教育に今後もご協力下さいますようにお願い申上げます。

卒園児の保護者の皆さまへは、これが最後の保育通信になります。まずい保育通信でしたが長らくお読み下さりありがとうございました。

（44・3・4）

親が子どもに しなければならぬこと

どの子どもでも「自分でやりたい」「自分でやろう」という願いや意欲をもっています。たとえば、よちよち歩きが出来るようになった子どもが、階段などを昇ろうとします。親があぶない、未だ無理だと思って、子どもの手を握りますと、子どもは、はげしく、その親の手をふりはなそうとします。その時親が、しっかりと握りしめていますと子どもは、なんとかして振り放そうとし、それができないと泣き出してしまうのをよく見かけます。それは「自分でやりたい」「自分でやろう」としているのに邪魔されたので泣きだしてしまったわけです。

こういうような、「自分でやってみよう」とする心を正しく大切に育てていくことが、独り立ちの教育になり、将来おとなになってから、独立心の強い、しっかりした人間に成長して行くのです。しかし、時として世の親は、子どものその芽ばえを幼少時代に干渉しすぎることによって摘みとってしまいがちです。

子どもを保護しすぎたり、又厳格にしすぎたりすること。一方は、やたらと子どもに手を出し助けすぎる。又一方は、親の思うように子どもを従わせようと叱り、罰を加えたりして干渉します。その結果、子どもから自発性や自己活動の機会を奪ってしまうのです。

子どもたちに、どんなことでも試みさせてみることです。但しこの場合出来ないことや明らかに危険と思われることは、させるべきでないことは言うまでもありません。とにかく結果のよしあしは別問題です。本人が自分の力でやりとげて行くならば、本人は自信をもち、喜こびを感じるわけです。本人が自分の力でやり遂げたという行為をほめることです。そして、そのようなことがあれば、園と家庭が連絡しあって本人を共にはげましてやること、認めてやることです。

はじめから親は、よい結果を望んだり、他人と比べたりすることは、つつしまねばなりません。

とにかく、親が子どもにしなければならぬことは、子どもの成長を正しく助けることなのです。

でき得る限り子どもに自由を与え、困った時には正しく、少し手助をする。しかし、必ず、それは悪であり、危険であるとすれば、その時には、きっぱりと大声で「否(だめ)」というべきです。

去る二月号の保育通信でも述べました如く、親は子どもにとって、常に生活の指導者であると同時に生活の訓練者であることを決して忘れてはなりません。

（44・5・1）

雨の日

今年度も早や一学期が、もうすぐ終ります。うっとしい日々ですが皆さまお変りありませんか。

今も雨のため屋外に出て遊べない子どもたちは、それぞれ、おもいおもいに部室の方々で

たのしく遊んでいます。本を見ている者、数字の遊びをしている者、オルガンをひいている者、黒板に白黒青黄のチョークをつかってロケットや人形を画いて、さかんに想像でひとりごとを言っている者、テレビの子供番組を見ている者、本を読んでいる先生の周りに集って熱心に聴いている者、パズル遊びをしている者、形遊びをしている者、中には何もしないで、ぶらぶらとあっちをのぞき、こっちを見てあるいている者……。雨が降っても子どもたちは、けっこう友達がおり、先生にみまもられて楽しく、はつらつと遊んでいる。誰も雨が降って、いやだなあ！などと思わない。そんな子ども達に接していると、長雨のためにうっとうしくなりがちなこちらの心も、つい忘れてしまう。子どもとはまことに愛すべきものだと思う。

それにしても、子どもは愛すべき者であり、愛の中で育てらるべきものだと思います。愛がなければ教育作用も決して成り立たないと言えます。

子どもは大人の愛を敏感に感じとり、自分を愛してくれる人には心より従い、その人が望している人のようになりたいと思います。自分を愛してくれない人には表面的には服従して

も、それ以上の支配力をもっている人間としての自然の情が、それを拒否します。ですから愛のないところには教育作用は成立しません。このように考えて思うことは、今日の教育不在ということは結局、教育の中に愛がないということです。

それにしても、時々親のいうことをきかないのに、先生の言葉にはよく従う子ども、又園では手におえない子供だのに、家では別人のように親のいうことをきく子ども、これにはいろいろと考えられますが、出来得るならば園でも家庭でも同じような安定感をもった子どもであってほしいと願います。

次の世代を荷って行く、この子どもたちが、すくすくと豊かな愛にはぐくまれ、安定した感情を常にどこででももっているように成長してくれることを願って家庭も園も共に努力しなければならないと思います。

（44・7・1）

幼児に於ける けんかの価値

けんかは不愉快なことです。しかし、幼児にとってけんかは「教育的な経験」なのです。けんかは、実際的な手段（体験）で他人（友だち）が何を望んでいるか、何をがまんできないか、ということを幼児に教えます。

たとえば、もしひとりの幼児が、他の子どもからおもちゃをつかみとったとしたならば、その子どもは、そのおもちゃを奪い返そうとして、けんかを始めるということを知ります。さらに「けんかをすること」は、仲間の評判を悪くし、精神的・肉体的な不快と苦痛を招くようになることを発見します。

幼児はまた、自分より大きな子、自分より強い子とけんかをすれば、敗北を喫するだろうということもわかります。うまいぐ合に扱える自分より弱い子や、小さい子と争ったならば弱い者いじめをするよくない子として恥ずかしい思いをさせられるでしょう。

このように幼児は、けんかを通し、いろいろなことを学び知り、さらに、けんかを通し親や教師がよく指導することによって、幼児は協同や協力のような、いっそう社会的な態度を知り、そうすることによって、自分の目的が愉快に果たされることを学びます。

勿論、幼児のけんかは、どのようなものでも教育的によい、というのではありません。生活環境のゆがみや、パーソナリティーのゆがみからくるけんかは、それ自体むつかしい問題が介在し、特別な指導をしなければなりません。

また一方、けんかもできないような引込み思案の幼児も、指導上特に心を配らなければならないでしょう。

いずれにしても、幼児は、けんかをすることにより、不愉快さを味い、自分の目的が愉快にはたせるにはどうあらねばならぬかを学び体得するのです。

親は決して、けんかを一がいに悪いことをしてあたまから止めさせたり、けんか両成敗と叱りつけず、よりよく指導の時として用いましょう。

（44・10・1）

体罰の功罪

傑出人の中には、幼い頃にきびしい体罰を受けた者が多くいます。宗教改革者マルチン・ルッターもそのひとりです。マルチンの父は大変なかんしゃくもちで、マルチンが間違ったことなどをすると激しくなぐったということです。父の体罰があまりにも激しかったのでマルチンは家出をしたこともありました。マルチンのお母さんも厳格な人で、マルチンがクリを一つ盗んで食べたことを知れた時、血が出る程にはげしくマルチンに体罰を与えました。

このようにしてマルチンは、幼い頃から善悪の判断をきびしい体罰によってたたき込まれました。そのおかげで将来において、正義のために厳然と戦う勇気と鉄のように堅い意志とが養われたのだと言えます。

しかし、彼の幼児期の経験はあまりにもきびしすぎたが故に成長後の彼は、非常に疑深い性質と女性を軽べつする傾向をもつにいたったと言われています。

インドの独立のために戦ったネール首相も幼い頃からきびしいしつけをされました。六才

の時父の二本ある万年筆のうち一本を盗んだことが発覚した時、父によって激しくなぐられその傷をいやすために数週間も治療せねばならなかったということです。ネールはその時に受けた精神的・肉体的苦痛は成人してからも忘れることが出来なかった、と述べています。祖国の独立のために生涯をかけ戦った正義の士ネールの性格の一端にあった憂うつさは、おそらくきびしい幼児期の結果だろうと心理学者は言います。

ネールと同じころにインドの独立運動に貢献したガンジーも、幼い傾親にかくれてタバコを吸ったり、召使のポケットからお金を盗んだりの悪事をしたのですが、これらの悪事が露見した時、両親の反応は他の親たちと異なり、父親はしかりもせず、非難もせず、さめざめと泣いたというのです。この父親の崇高なまでの寛容さにガンジーは強く心うたれたと語りつたえられています。

以上の通り、歴史に於て傑出した人でも、幼い頃いろいろの間違いを犯した者が多くいます。しかし、彼らの両親が子どもの悪事に対して示した、はっきりとした反応が、おそらく子どもたちの正義の観念や強い意志を育てたのであると思われます。

ルターやネールは極端にきびしい体罰を受けましたが、幸いにもそれらの体罰は両親の愛情にもとずいてなされたものでした。若し只やたらに愛なく、きびしい体罰を与えたとすれば、正義の観念は育たず、単に反抗の精神だけが芽ばえたことでありましょう。また、ガンジーの場合ネールと同様に反英闘争の指導者となりましたが、その生涯を通して非暴力主義につらぬき得たのは、おそらく、彼が幼い頃父から受けた感化が、後の政治運動に於て現れたといえます。

いづれにしても今日、家庭でも学校でも、厳罰主義は姿を消してしまいましたが、愛情にもとずいたきびしい罰までが消え去った故に、善悪の判断が出頼なくなった人間が多く、真に人間正義のために戦う意志の持主が少なくなったとすれば、今日の子どものしつけ方に根本的な間違いがあるのではないでしょうか。特に父たる者、子どもの教育を母親のみにまかせず、その幼き日より、確固とした態度で子供に関わってもらいたいものだと願うものです。

（44・11・4）

白百合ホームの願う保育

「小さい時に一生懸命訓練しなさい。そうしたら、その人が大きくなってからも、そのことから離れることが出来ません」

ある人がこのように言いましたが、幼児の時期は、他のいかなる時期よりも、いちばん多くいろいろなことを覚えようとしており、そこでの体験は子どもたちが成人してからも、その人の基礎的性格傾向の一つとなって、一生涯少なからず影響してゆくものです。

さて、幼児が何を学び、どのように成長してゆかなければならないか、ということについて今日さまざまに論じられていますが、時として、ある人たちは外見的であり、宣伝的、営利的下心があり、時代に迎合的であり、一方に偏した片輪教育を幼児に強いたりして、悦にいっている不心得者たちがいます。

先にも申しました通り、幼児は他のいかなる時期よりも最も多くいろいろなことを覚え、将来に備えようとしている形成期でありますから、いろいろなこと即ち幼児の肉体と精神、

心と身体の生活全体が、正しく成長するように教育的配慮を熱心にしなければなりません。いうなれば「全人教育」こそ必要なのであります。

幼児が人間として、どのように成長してゆかねばならないかという具体的な姿を、わたしたちは、次の聖書の言葉に見いだします。

「イエスは、ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」

即ち、知恵の成長、身体の成長、社会的な成長、心と精神の一番深みのゆたかな成長（霊的な成長）です。

こうした成長は当然、恐れや困難に打ち勝って進む創造的な知恵・意志・情操をかね備えた人間を生み、育てます。

何ごとをするにも目標がなければなりません。目標への具体的なプログラムが必要です。更にプログラムにそった実行がなければなりません。そして、それらすべての基本に敬虔と謙虚とがなくては、独善におちいります。

次の世代の人間の文化、歴史を荷い、更によりよい文化を創り上げて行く人間を生み出す

仕事を、幼児教育はその根本としています。

人間の歴史や文化を、平和で安定したゆたかなものとして、よりよく創造して行くためには、どうしても、それを荷う人間に宗教的な畏敬の念がなければなりません。即ち「神を畏れ、神に愛される」人間であることが必要です。この宗教的な畏敬の念が教育と教育者の基礎になければ、正しく教育事業を進め完成することは出来ないと信じ、先に述べた全人教育をめざし、その日々の保育をおこなっております。

どうか、このような白百合ホームの保育の姿勢を充分ご理解下さり、保護者のみなさまも園が主催する各種の集いに積極的に参加下さり、学びの時をもっていただきたくお願い申上げます。

（45・2・1）

特に　卒園児の　ご両親へ

「英国では〝あなたの子どもは成績がよい〟と言われると、父母は喜こばないで〝では気をつけよう〟と言い、〝ひとがよい〟と言われると無条件で喜こぶそうです。それは、頭がよい、ということは、よく切れる刃物を持っていることに等しい、と考えられているからです」と、ある本に書いてあったのを読んだことがあります。勿論、英国人のすべてが、そうではないでしょうが、広く医学を含めた科学技術が高度に発達し、物質文化がいよいよ豊かになった今日、世の大人たちは、それについて驚ろいたり、感心したりばかりしていないで、先述の英国の父母の話しを真剣に考えてみる必要があると思うのです。

今日という時代は、世の大人たちが、こうしたことについて真剣に考えなければ、近い将来、人間はとりかえしのつかない事態を自から招来せしめることになってしまうと思います。そして、今日はその分れ路に立っているような時代だと申せます。

小学校に入ると、学業成績というものがあって、とかく、子どもの知能や手先の器用さなどが問題にされ、世の親はこれを伸し、それに必要な能力をつけるためだけに神経をとがらせ、テストの点、宿題の評価のみに目の色を変えて「よいひとがら」に育てるということを忘れてしまいます。

「成績がよい」ことと「人がらがよい」ということは全く関係のないことであります。にもかかわらず、それが同一のことであるがのように思い込んでしまうのが、私たちの常です。

「ひとがらがよい」ということは、単に「上品で」「性質がおとなしい」といったことではなく、科学や政治や経済などを生み出し、支配する人間の本質そのものにかかわる人格の豊かさ、高潔さを言っているのです。

こうした「よい人がら」への教育的配慮が、いちじるしく疎かにされている今日の社会、政治・経済の現状の中で、ひとり子どもたちを守ってやるのは、実に、それぞれの家庭であり、両親であります。

子どもは親が大切にすることがらを、同じように大切にするようになります。また、親が

敬意をはらい、尊敬するものを同じようにするものです。子どもの情操はこうして育ち、人格は形成されて行くのです。こうして育つ「人がらのよい」子どもは、その子自身・親・家に止まらず、国家や世界、人類にとって大切な宝であります。

今日、世の親は、このことに気づき、時流の馬鹿げた思想にまどわされず、追髄する愚かを演ぜず、未来の人間文化を正しく創造し得るための、安定した人間教育の道をしっかとわきまえて、歩んでいただきたいと思います。

白百合ホームは、こうしたことを園児やご両親、また自からにいいきかせ、その教育の根幹を聖書に求めて行って参りました。

卒園される園児の保護者のみなさまが、どうかこのことに心を止め、愛するお子様の今後の人間教育にはげんでいただきたいと願うものです。

（45・3・1）

新学年度の出発にさいして

新入園児をまじえて、いよいよ新学年度がはじまりました。この時にさいして、お母様方に是非とも考えておいていただきたい大切なことがらを申上げておきたいと思います。

あなたのお子さんの教育の土台は

今日、わが子の教育に夢中になっているお母さんで社会は充ち満ちています。しかし、その子どもの教育の土台はどうなっているのでしょうか。

家の外見が、どんなに美しく、また床の間や襖がいかに立派でも、かんじんの土台が無いならば、台風でも来ると、その家は忽ち到れてしまいます。

お母さん、あなたの大切なお子さんを幼稚園に入園させられましたが、はたして、その子どもの教育の目標とりわけ、土台は何なのでしょうか。

わたしたちは、愛児の教育を、時の権力や商業主義の一方的なペースにまきこまれること

なく、また親の虚栄の砂の上に置くことなく、永遠不動の岩である神のまことの上に立てねばならぬと思うのです。

人間のまことの道を教え示すことはすべての教育に先立つ、最も大切なことです。

どんなにすばらしく立派なものを身につけていても、確実な人間の生きる道を知らなければだめです。非行に走る子どものすべてが、頭悩が悪いとか体や心が悪いというのではありません。個人的に会って話すとき、他の子どもより純情で明るい子どもが多いようです。ただ、彼らは自分の生きる道がわからなかったために、快楽や享楽といった、その場の気の向くままに歩み、迷ってしまったのです。これは、子どもに知識のみ、つめ込ませるばかりで人間としての歩むべき方向も道も教えなかった大人たちの、土台なしの教育態度に一切の責任があるのだと申せます。

人間の生きるべき、まことの道を教え示すということは、すべての教育に先立つ最も大切なことです。

方法論だけあって土台なしの教育にふりまわされるな。

近年とみに、幼児の教育が盛んになり、ラジオ・テレビ・その他一般の講演会などで、有名人のお話しがあります。しかし、時としてそれらのお話に共通していることは、方法論であるということです。

おもしろく、おかしく、お母さん方の失敗、弱点を知ってデータを多くならべ、いろいろ例をひいて話しをして下さるので、一応何かわかったような気がしますが、一向にわが子の教育に実りがない場合が多いと申せます。それは、教育は方法だけではないからです。手段や技術をどれほど変えて、子どもの前に立って指導しても、もしお母さんが、「何を信じ、

どこに自から立って、どの方向に、何を目標として進ませよう」としているかが不明確であるならば、その教育はいわゆる台なしなのです。

手段・技術といった方法論にばかりとらわれ、ふりまわされ熱心になることが、熱意ある教育を行うことであると思い込むことは、一つの錯覚であります。こんな教師が多くいるところに、今日の教育の危機があるのです。

子どもに「何をするのか」ではなく、子どもの前で親や教師は「どう生き、どう在るのか」ということが大切なのです。

白百合ホームに、お子さんを送り出して下さったご両親は、この新学年のはじまりにさいし、自から「子どもの前にどう生き、どう在るのか」ということについて自己吟味していただきたいと思います。

又こうしたことについて、共に学んで参りたいと思います。

この一年、無事に神様のお守りのうちにすごせますよう祈ります。

（45・4・8）

今日に於ける教育の現状

或る人が申しました。〃子どもを幼稚園に入れたあたりから、お母さんたちは育児ママから教育ママへ姿を変えて行く〃と。

教育ママということについては、世上いろいろ論議を呼んでいますが、特別な教育ママは別として、一般的に言って、子どもを幼稚園に入園させるあたりから、少なくとも世のお母さんがたは、わが子の教育ということについて認識を新たにされることは確かです。

「サア！子どもを教育しなくては!!」とその姿勢を正されるのでありますが、では一どのように教育しようとされるのですか」と問い正してみると、その内容は非常に莫としているのであります。

周囲があまりにも教育、教育というので、そのムードに何かせき立てられて、とにかく遅れまい、とり残されまいという気分が、その教育えの意気込みの内容のようになっているのではないでしょうか。

こうしたお母さんへの教育えの無内容な意気込みの原因は、お母さん自身の子を思う故のおろかさということにもよりますが、実は、今日の教育といったものの実状がそこに反映されていると思われます。

今日、教育を受ける者も、教育を行う側も共に、「これでよいのだろうか」「教育はどう在るべきか」といった疑問、不安が大きくただよっているのです。それは、教育、教育という中で教育を受け、育てられて来た子どもが、体は立派で、ひとかどの理屈を言いわするが、真の底力に欠け、情緒的にも不安定で利巳的な小学生であったり。中学生ともなれば非行児が増し、その質も大人顔まけの悪事であったり。更に高校、大学生などに至ると神経症や精神病的な人間が、どんどん増加し、一方教師側も、教育に使命も情熱もない教師の数が多くなって来る。いわゆる「でもしか先生」の激増ということです。

事実、心ある教師や世の親が「こんなことで一体どうなるのだ」と教育に対し不安をいだくのは当然と申せます。

一方、人材を受けいれる社会の方でも、そういう人間は社会人としては困る、といった声

が次第に大きくなって来ています。やる気があっても、積極的に自分で考え、自分でたくましく自由にどこでも出て行ける人間でないと、社会人として明日の人間のよりよき社会をつくることは出来ません。

こうした状況に対して政府は、「期待される人間像」とかいうものを作り、一方的に教育の目標をおしつけ、混乱した状況を打開しようとします。しかし、このような政府や文部省の一方的なおしつけ教育は、教育として決して効を奏さないと言って反対する人がいます。これはもっともなことだと思います。

とにかく世の親は、その谷間にあって、ウロウロするのみで、一向に教育の混乱状態は解決へ向わないし、事態はより悪化するということになります。正に今日は教育あって教育なし、という一言につきます。そして世の親が、わが子の教育について確たる考えも持てず、右往左往するのも無理からぬところがあります。

なぜ、このようになったのでしょうか。それは、人間教育の根本精神をもたずして、只知識とか技術とかを与えればよいという教育の深い土台なしの場当り的な教育を人間教育だと

いう考えが支配的であったからです。こうした教育の姿勢は、幼児教育の最下位の下受け場となりつつあります。

しかし、こんな馬鹿なことはあってはなりません。

人間教育は、物をつくるのではなく、心をつくることです。人間の未来を見て、人間が共に平和で幸いであるような未来を、力強く創造し建設して行くための知識・技術を教えることもさることながら、それらをつくり出す精神を養い育てることであります。

（45・4・10）

白百合ホームの教育の根本精神

わたしたちは、キリストの教えを根本にして保育を行っています。では、その根本の教え

とは何かと申しますと、子どもは神様から与えられたものである。ということと、それ故に子どもを子どもとして限りなく尊重して行く。ということであります。

これは、子どもを可愛いいと思うこと、更に単に人類の未来を荷って行く者として、大切にする、ということとはいささか異なります。

わが子を大切にし、可愛いいと思わない親はありません。しかし、子どもは、神から与えられ、それ故に子どもを子どもとして限りなく尊重して行く、ということは、単に子どもを大切にする、吾が子を可愛いく思う、ということを越えて、子どもは、神から、親である、この私に育てるように、ゆだね、まかされ、あづけられたのだ、従って子どもは本来私のものではなく、神のものであり、神に委ねられたのである。だから、親である私は子どもに対してではなく、神に対して責任を感じ、子どもを尊重し、最善の努力と愛を傾けて育てたければならないのであります。

従って、子どもは、わが子なのだから親のすき勝手にしてもよい、という態度は絶対にゆるされません。子どもは、神からゆだねられた一人の人間として尊重し、あつかわなければ